植物標本庫だより

標本情報をインターネットで公開します！

「みどりのこえ」は刊行50号となりましたが、環境保全研究所植物標本庫の収蔵点数も現在約20万点に達しました。今年度からは、これら多数の標本情報をより広く発信してゆく事業がスタートしています。

今後国立科学博物館が運営しているｗｅｂ公開型データベース（サイエンスミュージアムネット※）に、毎年約22,000点分の情報を提供してゆきます。つまり、来年度より徐々にインターネットでの閲覧が可能となります。また、国立科学博物館からはデータ変換（情報提供）手数料が支払われますので、これを活用しさらなる長野県内の標本情報の充実をすすめます。

現在６名のボランティアの方々のご活躍も標本庫の運営には欠かせません。植物標本にふれてみたいというかた、是非一度研究所へ足をおはこびください。お待ちしております。

※S-Net：http://science-net.kahaku.go.jp/

（蛭間　啓）

読書案内

『ねずみに支配された島』

ウィリアム・ソウルゼンバーグ著、野中香方子訳
（文藝春秋、2014 年、301 ページ、1,800 円＋税）

種の絶滅の大半は、地球の陸地の５パーセントにすぎない島でおこっている。鳥と爬虫類に限れば、絶滅種の三分の二は島で暮らしていたものである。その絶滅は、人だけでなく、人ともにやってきた動物たちによって引き起こされている。かわいらしいと思えるネズミでさえ、いやネズミこそが島の生きものには最大の脅威となること、捕食者とともに進化してこなかった島の生きものがいかに脆弱であるかを、豊富な資料をもとにわかりやすく説明している。ポリネシア人の航海の友キオレ（ナンヨウネズミ）やクック船長とともにやってきたドブネズミ、その後のクマネズミ、それらが、陸上性哺乳類のいなかった鳥類の楽園、ニュージーランドの動物相をいかに壊滅的なものにしたか。

ネズミに支配されたのは、南の島だけでなく、バハ・カリフォルニアの島々やアリューシャン列島（キスカ島やラット島など）でも同様である。

1980年代以後、それら島々でブロジファクム

（抗血液凝固剤）投与によるネズミの駆除がおこなわれ、ウミツバメなど海鳥の個体数が劇的に回復した。しかしそれには罪もあることにも触れている（例えば、高次捕食者ハクトウワシの犠牲など）。

本書の最後では、イースター島の文明の衰退は、人自らによるのではなく、実はネズミが関与したのではないかという学説にも触れている。

非常に読み応えがあり、おもしろく、外来生物のことが問題になっている昨今、一読をお勧めしたい本です。

（堀田昌伸）